

梶原町 津野山神楽の現状と課題に関する研究

—存続神楽と中断神楽を比較対象として—

1170461 野村葵

高知工科大学 マネジメント学部

1. 概要

高知県の西部に位置する梶原町の伝統文化である「津野山神楽」を対象として、津野山神楽の演舞内容とそれが持つ意味を理解した上で、津野山神楽と地域との繋がり、現状と課題について明らかにした。1948年、掛橋富松翁により津野山神楽保存会が設立され以降、受け継がれてきた津野山神楽であるが現在では、松原地区、初瀬地区では地域の人口流出や若者の減少などの要因から伝承が中断している。また、現在神楽が舞われている四万川地区、東区、西区、越知面地区でも少子高齢化や人口流出の波から後継者不足や神楽に参加・観覧する地域住民の減少など様々な問題を抱えている。津野山神楽が衰退すれば地域内でのコミュニケーションが減るだけでなく、梶原町全体での活力が低下していくと考えられる。

そこで、本研究では、現在中断した松原地区と現在も存続している西区・東区の津野山神楽を比較し、地域と伝統文化の現状や課題を抽出し、伝統文化が地域住民に与える影響とどのようにしていけば、よりよい関係性を築いていけるのかについて考察する。

2. 背景

日本は地理的位置により、四季が明瞭に分かれている。日本人は、これまで自然とともに生活を送ってきた。自然には癒しを求めたり、時には私たちの生活に被害を及ぼしたりしてきた。そこで、日本人は自然から得た恵みを神の御利益と考え、春の栽培前や秋の収穫後などを節目に神々にお祈りをする風習が定着してきた。神楽は、神々と地域の人々と交流する場として、古来から地域の神事や娯楽として位置づけられてきた。このような地域の伝統芸能は、地域の存在意義を再確認する場であるとともに、地元に対する愛着を深める1つのアイテムなのである。地域独自の文化が形成され、地域社会が躍動感に満ちあふれ地域の個性を輝かせるものである。伝統文化は無意識のうちに次世代に伝えてきたその地域ならではの様式が、現代にしっかりと根づいている。地域文化を

形づくる伝統や風習等を大切に 保全し、継承し、活用していくことは魅力ある美しい街づくりへと繋がっていくことにつながる。このような伝統文化を伝承していくためには「人」が大切である。1人でも多くの人の心に伝統文化が生き続け、伝承することが求められる。

しかし、中山間地域では少子高齢化に起因して若年層の減少が急速に進行しており、地方の経済・社会は少子高齢化や過疎化進行が続いている。そして各地域、特に中山間地域では、産業振興に力を入れる一方で、近年では、住民の日常のくらしや地域コミュニティの面にも目を向け、その充実を図ることで活性化を促す方向も広く目指すようになってきた。その中で、高知県の梶原町の津野山神楽は、神楽保存会を軸に普及活動に取り組み、地域の人々の中に深く浸透している結果、現在も様々な課題に直面しつつも存続している伝統文化の一つである。

津野山神楽の事例を調査することは、同様に存続の危機に瀕している伝統芸能の伝承方法の参考事例となるだけでなく、「地域」の在り方を再検討し、伝統文化の素晴らしさを再確認する材料になり得ると考えられる。また、存続神楽（現在存続して神楽を行っている4区）と中断神楽（現在神楽を中断している2区）を比較することにより、地域間での意識の差を調査する。地域住民の津野山神楽に対する考え方や関わり方の変容や問題を浮き彫りにし、昔と現在でどのように変化したのかを検討することにより、これからの伝統文化の在り方を提案する。

3. 目的

本研究では、梶原町の人たちにとって地域の伝統芸能である津野山神楽とはどのような存在なのか、また、「地域」とどのような関係性を持っているのかを明らかにし、今後の津野山神楽の存続方法の方向性を提案する。

4. 研究手順

本研究は、はじめに既往文献調査を行い、梶原町と津野山

神楽地域以外の伝統文化の結びつきについて整理する。次に、津野山神楽の現状及び津野山神楽の概要、現状を把握津野山神楽に関わるステークホルダーを存続神楽・中断神楽ともにそれぞれ抽出する。また、各ステークホルダーを対象としたヒアリング調査を実施し、活動の現状と課題、問題点を明確化し、津野山神楽と地域住民の関係性を存続神楽と中断神楽とを比較する。その後、地域住民へのアンケート調査を行い、存続神楽と中断神楽の比較・検討をする。最後に、課題に関する解決策を提案する。

5. 神楽の概要

5.1 神楽とは

神楽とは、日本の神道の神事において神に奉納するために奏される歌舞のことである。神社の祭礼などで見受けられ、平安中期に様式が完成したとされており、現在、日本全国に約 3000 を超す神楽団体が存在している。神楽は、宮中の御神楽と民間の里神楽の 2 種類に大きく分けられているが、里神楽は、巫女、神主、山伏といった人々によって傳承されてきた。全国的に広がる神楽は、各種各様であるが、一貫した特色としては、必ず神座を設け、神々の招請をもって執り行うことが挙げられている。また、幾つかの神社では、近代に作られた神楽も行われている。

5.2 神楽信仰の始まり

日本の信仰の始まりは縄文時代まで遡り、今に残る数多くの縄文時代の遺物からも自然崇拝や呪術を重視していた古の暮らしを垣間見ることができる。自然崇拝からの流れを汲み、神が自然や事物に降臨し、鎮座するという観念が明確になってくると神が降臨した際に身を宿す「依り代」としての巨石や樹木、そして太陽が昇り沈む聖域である高い峰を祭祀の対象物とし、やがて、人の手が加えられた神座が設けられるようになり、神座に神を迎え、祈祷の祭祀を行う。祈祷は、人々の長寿、豊穰な実り、また、災難を追い払うことを目的としていた。神楽の一貫した特色としては、必ず神座を設け、神々の招請をもって執り行うことが挙げられる。古来の祭祀文化を伝えるものや畏敬や感謝を込めた祈りの表現。そして、人々を笑顔へと導く娯楽など神楽の目的は様々だが、私たちの暮らしに寄り添ってきたものと考えられる。

6. 津野山神楽の概要

6.1 歴史・文化

913 年、藤原経高が津野山郷へ入国し、伊予の国より三嶋神社を勧請して守護神として祀られた時代から、代々の神官によって歌い継がれたものとされている。1945 年の敗戦と神楽修得者の減少により、一時廃れかかっていたが 1948 年に神楽復興の気運が起こり、津野山神楽保存会が設立された。それまでは、代々特定の神職により、世襲的に歌い、舞い継がれたがこの技を修得している唯一の神職、掛橋富松翁を師として旧習を破り、村内各地区より推された青年 10 数名に口伝により伝承講習された。津野山神楽は、1 年の五穀豊穰に感謝する秋祭りで、町内の各地区で奉納される。舞は、18 節からなり、全体を通して正式に舞を納めるには約 8 時間を要する。各節で登場人物や場面は変化していくが、全体を通して神話に基づく大きな物語の流れがあり、急テンポの楽に合った舞で優美荘重である。中断神楽地区（松原地区）では、1963 年 12 月に掛橋富松翁が松原区内の 10 数名に伝承したと言い伝えられている。1964 年 3 月には春の大祭で 18 節を天神宮で全て舞っていた。しかし、2012 年より後継者が不足したために津野山神楽を中断している。

6.2 梶原町における津野山神楽の概要



(図 1 : 梶原町地図)

春	三嶋五社神社 (四万川地区)
10月30日	三嶋神社 (東区)
11月 3日	三嶋五社神社 (越知面)
11月23日	三嶋神社 (西区)

(図 2 : 津野山神楽開催スケジュール)

以前は、津野山神楽は栲原町に位置する 6 区全てで舞われていた。しかし、現在は 4 区（四万川区・越知面区・東区・西区）で現在も継続して行われており、毎年同じ時期に舞われている。（図 2：津野山神楽開催スケジュール参照）

しかし、残り 2 区（初瀬区及び松原区）は、その年に行事ごとがあれば保存会の方々が舞を行うことになっているが、現在ほとんど舞われておらず津野山神楽を舞うことを中断している。

7. 現地調査

7.1 現地視察

①目的：・津野山神楽を舞っている現場を視察することで、周囲の状況等を確認し、把握する。

・存続神楽の実態を調査する。

②日時：平成 27 年 10 月 30 日（東区 三嶋神社）



（写真 1：閑散時）



（写真 2：ピーク時）

開始時は観光客が前を陣取り地元の方はほとんどおらず、笛や太鼓の音以外はカメラのシャッター音のみが聞こえ閑散

としていた。演目中盤の「大蛮」（鬼面の大蛮に生後 1 ヶ月未満の乳幼児を抱いてもらい五方の神々に祈ってもらうことで無病息災を願ってもらう観客一体型の演目）が始まる頃には、観客はピークを迎えはじめ、地元の方が徐々に増え始めるが、大蛮終了後は早々と地元の方々は帰ってしまった。地元の方々はメインの演目が終了するとすぐに帰ってしまう傾向がみられた。これにより閑散時とピーク時で観覧者の割合が大きく変動した。

栲原町の成り立ちについて書かれた崎村義郎/著『愛村回顧』によると神楽復活の 1948 年当時、「村民は、朝から三島神社の拝殿はもとより周囲の廊下も十重二十重に詰めかけ盛況を極めた。」との記述があり、この頃は地元の観覧者が多かったことを裏付けている。しかし、現在では朝から観覧に来ていたのはカメラマン（観光客）がほとんどであった。また、地元の人はカメラマンが良い席を確保しているため周囲を遠慮がちに取り囲むようにして見物していた。観覧場所以外の区域に立ち入って写真撮影をしていたカメラマンを津野山神楽運営側が注意していた。さらに、最後まで神楽を見ていく地元の方は稀であった。これは、保存会・町役場の方々が外（観光）への発信に力を入れた効果である。一方で、栲原町の方々は神楽を観覧することに対して昔ほど熱心ではなくなってしまったのではないかと考えられる。

7.2 主催者側見た津野山神楽に対するヒアリング調査

①目的：栲原町の現状を掴むとともに津野山神楽の概要を把握し、どのような課題があるのか。また、これまでどのような取り組みを行ってきたのかを理解する。

②対象：津野山神楽保存会会長 川上さん（存続神楽）

松原津野山神楽保存会会員：下元さん（中断神楽）

③日時：平成 28 年 3 月 12 日、平成 28 年 3 月 13 日

④ヒアリング内容

・文化伝承の経緯 ・衰退した経緯 ・今後の課題 など

⑤各地区の主な特徴

・栲原町における存続神楽地区の特徴（東区）

栲原町の中心に位置しており、人口・年齢層ともに栲原町の中では比較的余裕があるということや交通のアクセスもよく道路も綺麗に整備されている。このため、孫や子供が祭り

の時期には帰ってきやすい。また、津野山神楽保存会が設立されており様々な支援がある。祭りを成立させていることもあり、地域の方々が津野山神楽に対して協力的に資金的な援助などを行っている。しかしながら、観光客向けに披露される神楽になりつつある。

・ 梶原町における中断神楽の特徴（松原地区）

梶原町の中心より離れており、人口が流失に歯止めが立たない状況である。非常に山道が多く交通のアクセスが比較的悪いため孫や子供が帰ってこない。津野山神楽保存会の介入がないため自分たちの地域で松原津野山神楽保存会を設立したが、それぞれの地区の保存会が協力体制をうまく整えることが難しかった。また、一度は協力体制をとっていたものの存続神楽地区の津野山神楽とは伝播形態が異なり、舞いも少し異なるために舞いを共有することを拒んできた。そのことにより、2012年頃から神楽を舞うことが困難になり、その頃に小学校が廃校となり津野山神楽の継承活動が維持できていないのが現状である。

しかし、観光客向けの津野山神楽の舞いとは大きく違い、自分たちの地域の人たちへ楽しんでもらうために神楽を舞っていた傾向がある。

⑥ヒアリング結果

・ 津野山神楽保存会 川上さん

地域にどのようなアクションを起こしたか	存続に対してどのように努力したか	今後の展望	その他
行政からの支援がないために地域住民から補助金を集めるように保存会側から声掛けを行った。	・ 神楽を高知市内や県外に赴き、出張で舞いを行っていた。 ・ 学校教育の一環として神楽の授業を取り入れた。	今後も神楽を存続させていきたい。観光客だけでなく、もっと町民が見に来たら嬉しい。	神楽を観光資源にしたことにより、以前とは違った舞いになっている。

(図3：存続神楽ヒアリング結果)

・ 松原津野山神楽保存会 下元さん

地域にどのようなアクションをおこしたか	存続に対してどのように努力したか	今後の展望	その他
松原でも保存会を立ち上げ、ボランティアを募り住民のやる気だけでなく地域のやる気に繋げようとした。	・ 松原の神楽を広めるため市内まで出張し、舞いを行っていた。 ・ 松原に小学校があった頃は神楽教育を行っていた。	できることなら神楽を復活させたいけれど、高齢化・人口流出が原因でなかなか難しいという現状である。	・ 存続神楽と共同で何度か舞いを松原で行ったことはあるが、一緒に舞うことには抵抗があった。 ・ なくなって寂しいという声がある。

(図4：中断神楽ヒアリング結果)

どちらの地区も津野山神楽存続への取り組みとして神楽を広めるため県外へ出張を行い、学校教育の一貫として神楽を

取り入れるなど、行っていた神楽への取り組みや維持するためのプロセスは同様のものではなかった。また、神楽を存続させていきたいという気持ちも実際に運営していた各保存会の方たちの意見は同様のものではなかった。

これにより、中断神楽地区の津野山神楽衰退の大きな原因は社会的変化が関わっていることが分かった。中断神楽地域は津野山神楽の後継者を育成するプロセスを構築する前に人口流出や若者の減少、梶原学園への統合が決まり学校がなくなってしまうために、自分たちの地区だけで文化伝承をしていくことが困難な状況となってしまった。

7.3 観覧者、地域の差から見た津野山神楽に関するアンケート調査

①目的：実際にそれぞれの地域住民の意見を伺うとともに、津野山神楽を観覧している人たちは地域間でどのような気持ちの差が出るのか調査する。

②対象：西区津野山神楽 観覧者（31名）

松原地区の方々（21名）

③日時：平成28年11月23日（西区）

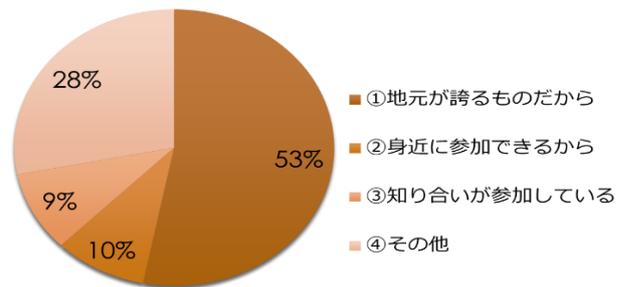
平成29年1月10日、30日、31日（松原地区）

④アンケート内容

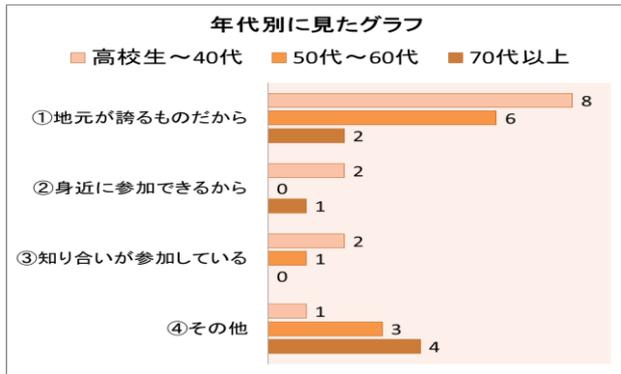
・ 津野山神楽が地域に与える貢献度 ・ 観覧する目的など

⑤アンケート結果

(1) 存続神楽地区



(図6：観覧しに来た理由)



(図7：観覧しに来た理由/年代別)

グラフ(図6.7)から分かる通り、存続神楽地区の方々はその年代も津野山神楽を自分の地域の「誇り」と考えている人が多い。特に、高校生～40代のこれから津野山神楽を受け継いでいく年代からの回答が一番多かった。高校生にアンケートをしている際には、自分たちの地区には神楽があって当たり前だ。神楽がなくなって欲しくない。など若いころから神楽に対する愛着が非常に強く、心のより所になっていることが分かった。

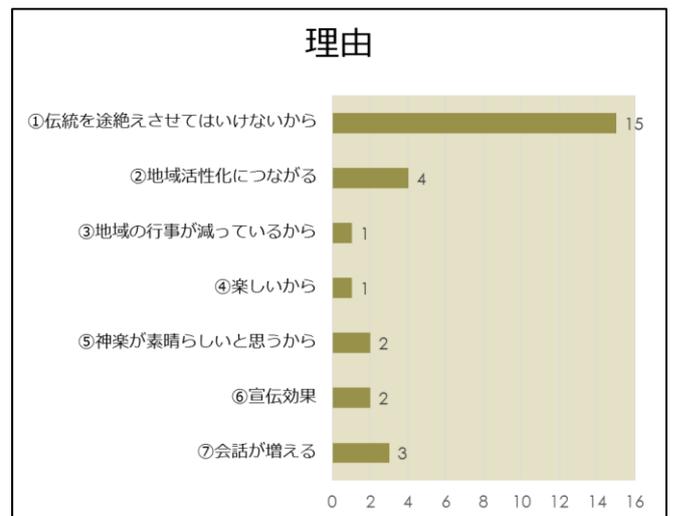
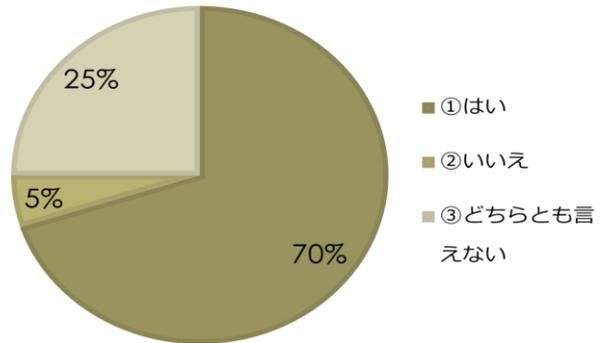
	現在と過去の比較	課題
30代・女性 (西区)	若い頃はあまりじっくり見ることはなかったが、現在はストーリー性があるものが多いのでしっかり見ている。	後継者不足
60代・女性 (東区)	今の方が衣装等がおしゃれになって見応えがある。	橋原町外の人に見に来てもらいたい割合と今のままで満足している。
20代・男性 (西区)	以前はもっと人がいたが、現在では減っている。	神楽の開催日をまとめるたり、もっと人が来られるようにずらしたりしてほしい。

(図8：存続神楽地区アンケート結果)

課題としては以前よりも観覧者(町内の人たち)や津野山神楽の後継者がどんどんと減少している現状を危惧していた。しかし、一方で後継者が不足している現状がありながら課題の欄に書かれていたもので意外に多かったのは「今のままで満足している」という意見であった。存続神楽地区の観覧者の方々には後継者が減少していると言いつつも毎年ある一定人数の後継者は確保できているため観覧者側からの意見の中からは津野山神楽を通して、地域のコミュニケーションも増え、充実していると考えられた。

(2) 中断神楽地区

津野山神楽を松原地区で
もう一度見たい・行いたいと思うか？



(図9.10：もう一度神楽を行いたい/理由)

中断神楽地区では地域の方々の神楽への熱は冷めておらず、津野山神楽への復興の気運は高い。中断してしまった現在も伝統文化を大切に思う気持ちは継続し続けている。できるものなら神楽を復活させたいという意見が多く聞かれた。

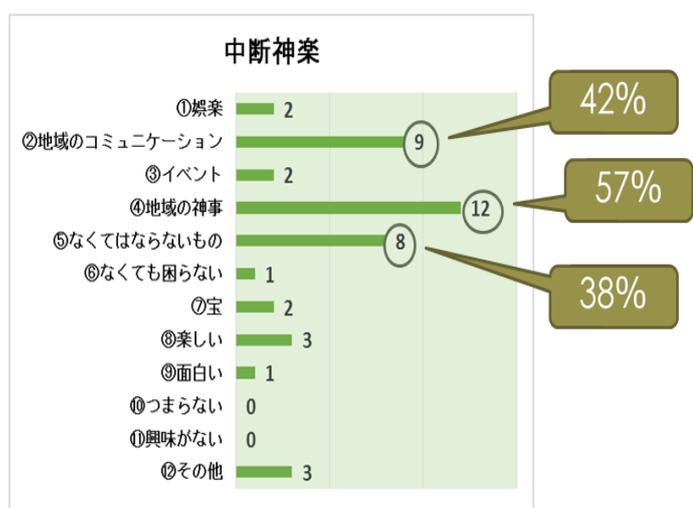
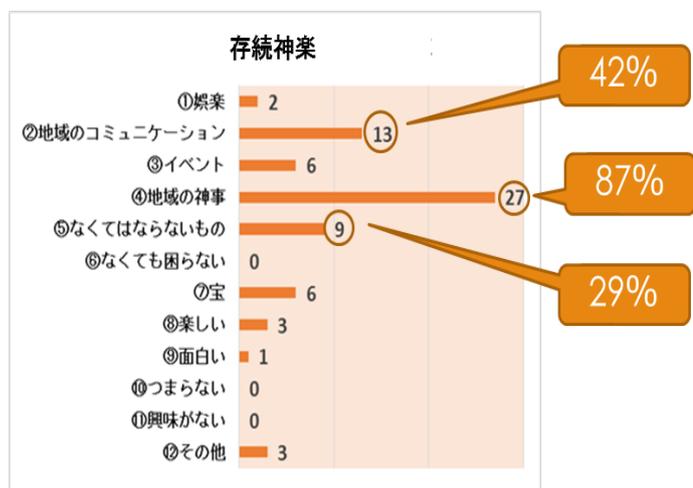
	今後の展望・自由記述
70代・男性	練習して存続できる状態を保ってほしいと思う。外部(町内・町外関係なく)の人が継続しても全然嫌じゃない。橋原と松原の神楽が合体してもよいのではないかな。
60代・女性	どんどん昔のように戻って欲しいけど、現実的には難しい。
80代・女性	毎年続けてほしい。続けることでお参りする人が増えて地域活性化につながるのではないかな。

(図11：中断神楽ヒアリング結果)

中断神楽地区に方々は津野山神楽に対してネガティブな意見はあまりなく、存続神楽地区と同様に津野山神楽を大切に思う気持ちにほぼ変化がなかった。年齢や体力的なハンデが

なければ、本当は津野山神楽を続けていきたくったことや地域活性化につながるのではないかな等の前向きな意見が多かった。また、松原津野山神楽は存続神楽地区で舞われている津野山神楽とは伝承形態が異なっている。津野山神楽は1945年に伝承されたのに対し、松原津野山神楽は1963年に伝承された。舞いの細かい動作が少し異なっているために何度か共同で津野山神楽を行ったことはあるものの、中断神楽地区と存続神楽地区で舞いを共有することができにくかった。そのために存続神楽との協力体制が整っていないことから、継続していけるのなら存続神楽地区と協力していくことも重要だと考える人も多く、神楽を必要に感じており、伝統を後世へ繋げていきたいという意見も多くあった。

(3) 津野山神楽の存在の比較



(図 12：あなたにとって神楽の存在とは)

存続神楽地区での津野山神楽の存在はある意味当たり前の

存在と認識されており、一番多い④地域の神事は約87%となった。2番目に多い意見の地域のコミュニケーションとしての機能は全体の約42%である。また、なくてはならないものという回答に関しては、29%と少し低い結果となった。今後、過疎化などにより神楽が衰退していった場合、地域のコミュニケーションを図る場としての価値などに気付いていくのではないだろうか。

対照的に中断神楽地区の場合は、一番多い意見の④地域の神事は57%と存続神楽地区よりもかなり低い結果となった。地域のお祭りが衰退し地域の方々が集まる機会が少なくなってしまったために、②地域のコミュニケーションとしての機能は全体の約42%。また、なくてはならないものという回答は全体の約38%と存続神楽よりも高い割合である。津野山神楽に対して地域の方が集まってコミュニケーションを向上させる場として期待されていることが分かる。年代が離れば共通の話題も作りにくく、会話があまりはずまないが「津野山神楽」という共通の話題で会話をすることができあらゆる年代を通して人と触れ合うことができる。地域の中で自然にコミュニティーの形成ができることが津野山神楽のよいところである。津野山神楽が行わなくなって初めてたくさんの恩恵があったことに気づき、現在でも津野山神楽のことをなくてはならないものと認識していることが素晴らしいと感じる。中断してしまった現在でも津野山神楽を思う気持ちは存続神楽よりも高いことがこのアンケートを通して分かった。

その他は、存続神楽、中断神楽ともに似たようなグラフとなり、津野山神楽を地域の神事としての役割やつまらない・興味がないなどのネガティブな意見はほぼ見られなかった。現在、中断神楽地区では津野山神楽以外の地域での集まり(お祭りなどや地域のイベント)もどんどんと衰退傾向にあり、それともなって地域とのつながりも希薄化している状態にある。そのため、地域間でのコミュニケーション不足が深刻化している。これは、存続神楽地区にたいしても今後起こりうる課題として考えていかなければならない。

(3) ヒアリング、アンケート調査を通して

ヒアリング、アンケート調査を通して、存続神楽地区、中断神楽地区の主催者側・提供者側(観覧者)ともに津野山神楽に対する意識や愛着にそれほど相違は見られないことが分かった。二つの地区の方々ともに津野山神楽に対して存続して

欲しいと願い、津野山神楽に対して誇りや大切に思っているということを感じることが出来た。

10. 今後の津野山神楽の文化伝承について



(図 10 : 現在の関係者マップ)

①現在、津野山神楽保存会と松原津野山神楽保存会の間では協力体制が全くと言っていいほど整っていない。津野山神楽保存会は梶原町全体で津野山神楽を地域の伝統としていきたいという気持ちがある一方で、松原津野山神楽保存会や松原地区の住民も津野山神楽を自分の地区で舞いたいという希望もある。



(図 11 : 理想の関係者マップ)

上記の図 11 のように赤字部分の協力体制が整えば継承や人員の変化に対応できるようになり、梶原町全体での地域活性化につながる。また、津野山神楽を全地区で復活させることで地域の方々の神楽復興へのやる気にもつながる。まず、この仕組みを作り出すことで中断神楽を復活させる最初の取り掛かりを作ることが重要と考える。

②親から子への継承の結びつきが強固なものになれば、ある程度人口が減少していても存続は可能であるのではないだろうか。親が子へまたその子供へという体制が整い、体が

勝手に動き、自然に津野山神楽を舞える環境を作ることが重要である。しかし、近年の核家族が進んでいる中では、この継承方法が難しくなっているため学校教育の一環としてこれからも神楽を取り入れていくことが重要である。少しでも多くの人たちを学生時代から巻き込んで伝統文化を大切にしていけるべきだという認識を確固たるものにしていかなければならない。

③地元から離れ居住を移していても、年に1度は神楽の時期には若者世代が帰省し、舞いを見て伝統文化に触れる機会を設けることが伝統文化の継承につながる。それを可能にするために、帰省してきた人たちでも簡単に舞えるようにすることや自分の地元で子供の無病息災を願ってもらえる大蛮をしてもらうなど、どんなかたちでも津野山神楽を見に帰ってきたいと思える環境作りが大切である。

④自分の子供や孫が津野山神楽に参加することにより、地域の方々が神楽を見に集まる。自然に地域のコミュニケーションする機会が増えることで地域が豊かになる一つのきっかけになるのではないだろうか。

11. 本研究のまとめ

11.1 梶原町住民の津野山神楽に対する意識

- ・梶原町では、地元の人で津野山神楽を最初から最後まで見る人は稀であり、保存会・町役場の方々が津野山神楽を観光として力を入れてしまったために津野山神楽を観覧することに対して、昔ほど地域の方々は熱心ではなくなっている。
- ・津野山神楽を主催していた存続神楽・中断神楽の保存会の方々は地域こそ違うが、神楽に対する愛着や存続の意識、誇りに思う気持ちは相違がないということがヒアリングを通して分かった。
- ・地域住民の意識も津野山神楽を大切に思う気持ちに相違は見られなかったが、存続神楽地区の方々よりも中断神楽地区の方々が津野山神楽に対して中断してしまった現在だからこそ、思い入れが強いことがアンケートを通して感じることができた。

11.2 今後の津野山神楽の文化伝承

- ・まず津野山神楽保存会と松原津野山神楽保存会の歩みよりや親から子への伝承形態を確実なものにすること、また、

津野山神楽がある時期に若者世代が帰省し津野山神楽に触れる機会を少しでも多く持つことが大切である。

12. 今後の課題

- ① 梶原内で他の祭事に関しても愛着度や誇りに思う気持ちが同様にあるのか、その地域と伝統文化の関係性について調査する。
- ② 本研究では、主に松原・東・西区をメインに調査を進めた。そのため、6つの地区それぞれの津野山神楽に対する思いや位置づけを区ごとに調査し、比較・検討する必要がある。
- ③ 津野山神楽の衰退を食い止めるために対策案についてもっとと具体案を考える。

参考文献・引用文献・協力者

【1】 雲の上の町 ゆすはら ホームページ

<http://www.town.yusuhara.kochi.jp/kanko/>

【2】 農林水産省（平成18年12月）

「美の里づくりガイドライン」

http://www.maff.go.jp/j/nousin/soutyo/binosato_gaidora_in/pdf/068p089s4.pdf

【3】 愛村回顧：崎村義郎著

【4】 津野山神楽：梶原町津野山神楽保存会著

【5】 早池峰神楽の継承と伝播

—東和町における弟子神楽の変容—：中島奈津子

【6】 「津野山神楽」の伝承過程における後継者育成の現状と課題に関する研究：古田春菜（2015）

【7】 津野山神楽保存会 会長 川上さん

【8】 松原津野山神楽保存会 会員 下元さん

【9】 西区のみなさん

【10】 松原地区のみなさん

